

写真詩

ねこのしあわせ

文&写真：川口幸宏



はじめに

1. パリに仕事に出かける準備をするぼくの姿を見て、「またねちゃんに会いに行くのでしょうか」と友人が冷やかす。「いや、調査が主目的です。」との受け答えはするものの、友人の笑みがさらにます。

2000年4月から1年間、長期研修生活をパリで送った時に共に暮らしたトトロ（♂）、ドララ（♂）、そしてあとから仲間入りしたリブル（♀）。ぼくの帰国後は、彼らはぼくのパリでの仕事のアシストをしてくれる知人とともに暮らしている。フランスに仕事を残してきたこともあり、その後もほぼ例年行事の如くパリに出かけるのだが、友人が冷やかすように、トトロたちがいなかったら、こうもしばしば行く気になるだろうか。人間の言葉の壁には苦しめられるのだが、ねこたちの言葉の壁はむしろ喜びでさえある。

古書店で入手した1871年3月末から5月末まで発行された「パリ・コミュン」の広報紙を、知人と共に眺めていると、トトロがミャーンと言いながら寄ってきた。そして、あろうことか、その貴重な新聞上に座り込み、やがてトトロの腹出し姿勢を取る。しばらく会っていないから忘れられてしまったかと、いつもドキドキものなのだが、「忘れてなんか

いないよ、ジーちゃん」とばかり、こうした挨拶をしてくれる。一方、ドララは我関せずと、少し離れたところで、箱座りをしているが、トトロがグルーミングをねだり始めると、トコトコと側に来て、ぼくに身体を擦りよせる。「ジーちゃん、お久しぶりですね。ぼくにもグルーミングして」とばかりの風情である。リブルは？リブルはテレビの上で寝ていたり、走り回ったり。やがてトトロはぼくから離れリブルの相手を始める。リブルにとってトトロはお母さんのような関係である。いつもの光景。

2005年7月、腸閉塞がもとで、リブルは夭折してしまった。知人が苦しみ悲しんだのは言うまでもない。その年の9月、「リブルを亡くしたトトロの落ち込みようがすごくて見てられない。」との「理由」付きで、メイ（♀）とサツキ（♂）とが新しく仲間入りした。さっそくトトロはメイをわが子のようにかわいがっているらしい。メイはメイで、あるはずもないトトロの乳首を求めておなかに顔を突っ込みチュパチュパ始めるのだとか。残念なことに、メイ・サツキとぼくとの関係は、けっして親和的でも平和的でもない。彼らにしてみれば「だーれ？このみすぼらしいジジは。危害加えない？」という関係認識なのだろうと思う。これから仲良くなってくれる？無理でしょうね。

2. フランスの教育の歴史研究を仕事としている限り、パリ

のアパルトマンの一室に籠もって本を読んでいるだけで済ませるわけにはいかない。図書館や古文書館、博物館、古書店などに通って資料を求めることなどは、アパルトマンに籠もった生活の一部でしかない。

セレストアン・フレネという人の教育足跡を追いかける旅では、トトロ、ドララ、リブルをねこバックに入れ、TGVに揺られて南フランスに旅をした。ドララとリブルはバックに入れられたとたん数時間の旅の供をおとなしく務めてくれるが、トトロは、籠の中でいかにも心細げな声で鳴き続ける。バックの中に手を入れグルーミングをしてやるが、それも一時のこと。やがて彼は、どうにかして、バッグから身を乗り出す。仕方がない、だっこをしてやるしかない。ねこ宿泊OKのホテルに投宿。彼らは籠から出されると、身をかがめてさっそく室内探検。危害を加えるものがないと分かったとたん、いつもの生活振りを始める。

調査で外出する時―朝早くから夜遅くまでの連日―は、ねこたちはホテルでお留守番。ドアのところに、日本語にすれば、「ねこが中にいます。掃除時には気をつけて下さい。お願いします。」旨の張り紙をしておく。それにしても、「お願いします」のくだりは、フランス語表記で S.V.P. なにやら高級酒の響きのある省略表現である。

地中海に面した都市ニースから北へバスに 1 間ほど揺られていくと、中世の古城の面影そのままのサン・ポール・ド・

ヴァンスという集落がある。ここは芸術家の集まるところとかで観光名所となっている。芸術家たちの店のウインドウ・ショッピングにはほとんど興味がない。細く入り組み、どの小路から上っても街の中心にある教会に行きつく、という祭政一致の、かつ「囲い込み」の街作りそのものに興味引かれる。一つひとつの建物の作り、とりわけ石積みの壁、漆喰などを眺めながら、初期そこに住んでいた人々の身分や生活振りに思いを馳せる。そういった習俗的なものが教育に与える影響は大きなものがあるからだ。

この小さな街にもねこがいる。パリでは屋外ねこを見かける機会が少ない―放し飼いが禁止されている―が、ここでは屋外ねこにしばしば出会う。ある門口で、盛んに屋内を覗き込んでいるねこに出会った。「締め出しを食らったの?」とくだんのねこに語りかけた。返礼はいただけなかったが、振り返ってぼくをしばし眺める。「お家の人、開けてくれるといいネー」と言ったとたん、室内から女性の大きな声が聞こえ、ドアが勢いよく開けられ、女性がぼくを恐ろしい顔で睨め付け、ねこを屋内に引きずり込み、勢いよくドアを閉めた。あまりの勢いに啞然慄然とさせられたが、数多い観光客が何らかの悪さをしたことがあるのだろう。「このねこは糖尿病持ちです。医者から食事制限されています。お菓子などをやらないで下さい。」職場近くに飼われているねこの首にこう認められたカードがぶら下げられている。きっとこの旅先で

出会ったねこも、このような事情があるに違いないと、考えを改め、街の中心部に向けて石畳の階段をやっこらやっと上っていった。

階段を上りつめるとやや開いた空間があった。どうやらそこは、土地の人々が交流を楽しむ広場であるらしい。ちょうどお昼時だったせいなのだろうか、人は誰もいなかったが、背中に人気を感じたので振り返った。それは人気ではなくねこ気であった。1メートルほどの石積みの囲いの向こうから、じっとぼくのことを眺めている。「こんにちは。怪しい者ではありませんよ。」と声を掛けたとたん、ねこは瞬時姿を消し、再び顔を出しこちらを見つめている。ぼくに興味があるのだろうか、それとも地域のボスねこで異邦人をどう撃退しようか、作戦を練っていたのだろうか。なかなかのするどい目つき、面相のよさなどが、このような妄想をたくましくしてくれる。彼とは、数度、声掛け→姿消し→顔出し→声掛けの掛け合いを楽しむことが出来た。次に行くところはどこで、何時まで、などという旅程を持たないぼくの、旅の楽しみではある。

これから先、フランスの地方都市をぶらぶらと歩くことはないかもしれない。そういう思いがあるからこそであろう、幾つかのところで出会った、それぞれがそれぞれに個性的なねこたちのことを無性に懐かしむ。

第1部 パリのねこたち

紐一本あれば

かわいいドラゴンを

たっぷり楽しませてくれる



「ぼくが　がんこ　なのではなく

きみが

なにも分かっていないのさ」



ねこは かくれても

すぐに 分かってしまったり

わざと 分かるように



爪が
引っ込んでいるのは
安らぎのあかし



ねこの夢

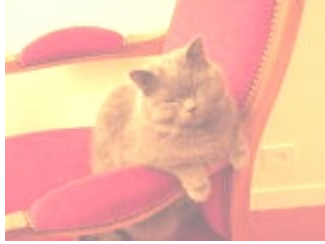
それは夢を見ること

とても暖かいところで

繰り返し

繰り返し





ねこは

詩人 と 詩人のひらめき の

仲間



ねこは
いつも 飢えている
何かほしい と



ねこは
連れあい
私たちの幸せ



羽布団のような体から

漏れてくる ゴロゴロは

止められるのに 先手を打つ主張



自分のねこを ほんとうに 愛するのなら
もっと考えましょう ねこの寝床について
ねこの嗅覚は とても気むずかしいのです



ねこが

仕事に取りかかることと言えば

小さなノネズミを

捕まえること





なんとすてきなことか

みんな ねこ だったら

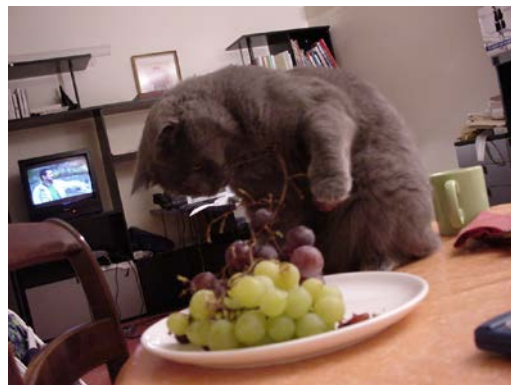
目覚めて ノビをしたり アクビをしたり



ねこは とても グルメ

だから 食い道楽の ところへ

押しかけてくる



赤ちゃんねこが
ぜったいに
大きくならなければいいのに



ねこは おとなしい振りをする

信頼し

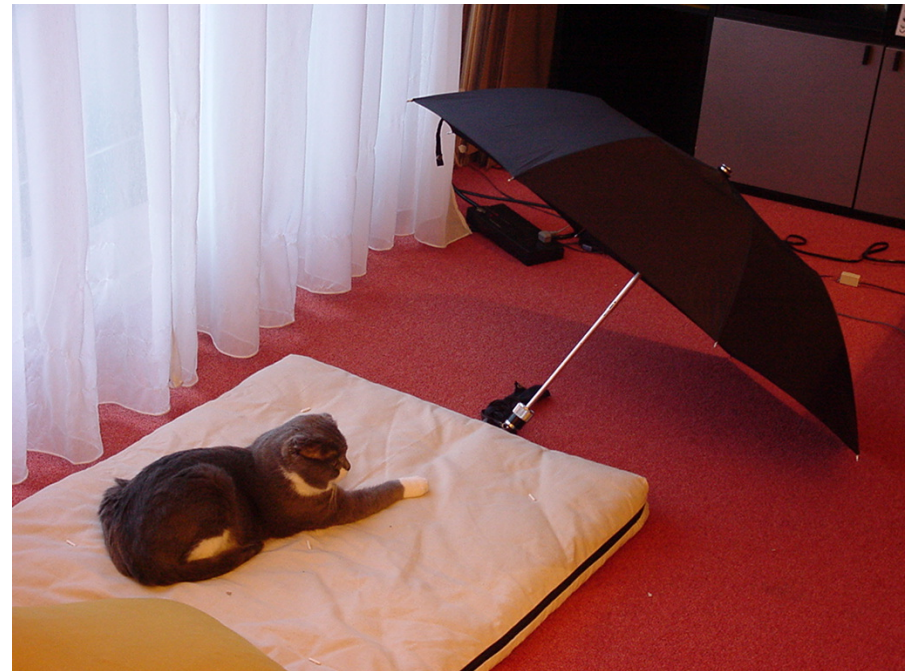
同時に 警戒する



「小さな玉」に
体を丸める ねこは

大はしゃぎを

始める ねこ



ねこの まなざしの中には

この上ない

ちゃめっけがある



ねこの 夢
それは 私たちの
真冬の 太陽



ねこの一日の　すてきな　時の三回は

食事と

昼寝と

箱座り



仰向けになって

彼があなたに おなかを見せたら

あなたは彼の友だち



....

いつも 思う

どうして ねこは

私たちの 頭より高いところに

何かを見つめているのだろう



気分次第で

ねこは

ヴィロードの脚になったり

するどい足になったり



ねこの姿が見えないとしても

慌てず、落ち着き払って

じっと 耳をすましてみよう

規則正しい 息づかいに





腕の冴え おねだりのため

舌の冴え

味見のため





ねこは 孤独 が好き



飼い主さえも

受け入れない



ねこは 最良の仲間

でも

とても 気まぐれな 友だち





ねこは 私に教える

従うこと を

その逆ではない



我が家の 本当の ご主人様

それは

ねこ

である



ねこは

高慢ちき

ではない

誇り高い

のである



自分のねこを
失ってしまったら
最愛の仲間をなくしてしまう





ねこは
舌の動きで感謝する
そう決めた時だけ



ねこは機嫌がいい

とくに

顔の上で 足を動かす時



いけません

眠っているねこを 起こしては

彼は目しか 眠っていませんから



ねこは9つの生き方をするそうです

そういうわけで ねこは

私たちに 限らない姿を示すのです



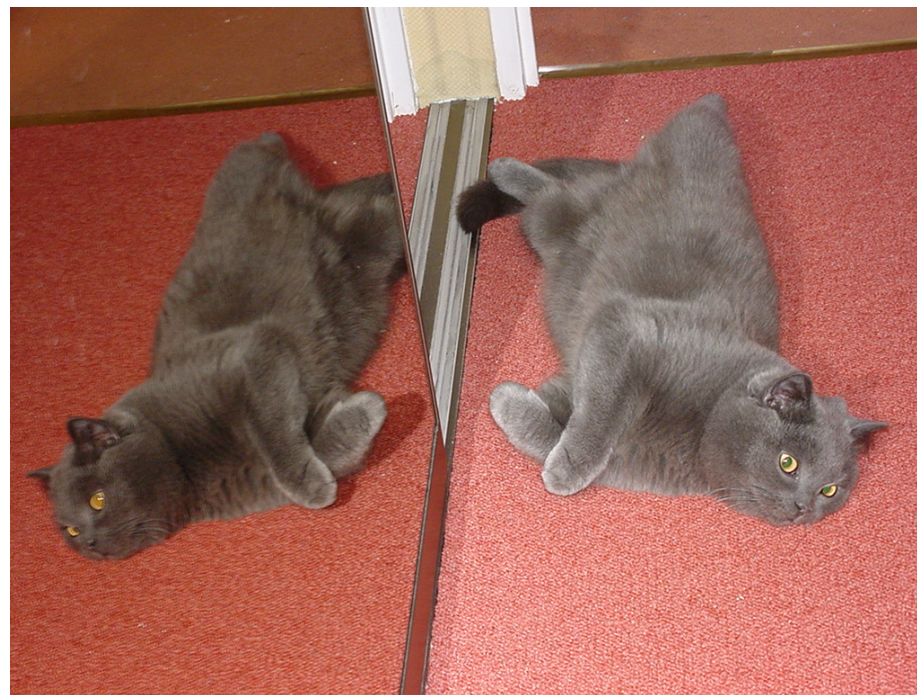
つやつやの冬の毛並みを生み出すために

ブラシをかけて 耳を傾ける

ゴロゴロ...



抜け目のない ねこは
利口な
ねこ



ねこがすり寄ってくると

人間どもは

何もかも

忘れてしまう





ねこは 私に ただただ

辛抱強くあれ と

教えてくれる



時には信じていいようです

ねこが私の心を読んでいる ということを

それほど

私の気分屋さんぶりに 気を遣っている ということ



ねこが熱中する 15 分の間は

通行の邪魔を

しないように

彼は 竜巻以上に 制御できません



ねこがいるところでは
だから
生きていることの幸せを
感じるのです



第2部 旅先で出会ったねこたち

しっかりと たっぷりと たんねんに

からだをなめて

身づくろい





ねこは友だち

きまぐれな

でも誠実な



彼を忘れよう 30 分間

そうすれば彼は

あなたに背を向ける 45 分間



ねこのバランス感覚は
長い髭の中に潜んでいるとか
だから
ねこは 髭を大切にするのです



分かってもらおうとするために

みゃあみゃあ

鳴く

いろんな声色を使って



登場したねこたち

パリ生活を共にし、その後はパリ知人宅のねこたち

トトロ 濃いブルー系

ドララ 濃いグレー&白 耳が寝ている

リブル 茶縹

パリ知人宅のねこたち

メイ 茶

サツキ 濃茶

旅先で出会ったねこたち

ブルゴーニュ地方のねこ ひげねこ、鳴きねこ

コート・ダ・ジュール地方のねこ 舐めねこ、後ろねこ

パリのねこ 豪華絢爛室内ねこ